



砂丘地と西川低地の暮らし —西区の歴史—

新川の上を立体交差で流れる西川

砂丘上に営まれた水辺の役所

西区は角田山とうろく東麓に始まる新潟砂丘と信濃川分流の西川沿いに開けた地域である。砂丘上には縄文時代から生活の跡が散見されるが、弥生時代後期（2世紀）には、信濃川と新潟砂丘の間の低地帯である六地山遺跡ろくじやま（曾和）で本格的な米作りが始まった。古墳時代前期（4世紀）には円墳で直径約30mの緒立八幡神社古墳（黒鳥）が築造され、この地域の首長はヤマト政権に組み入れられていった。

奈良・平安時代（8～10世紀ころ）には、信濃川分流の西川低地の小砂丘上に的場遺跡（的場流通）・緒立遺跡（緒立流通）しじょうく・四十石遺跡（東山）等の蒲原郡の官衙（役所）関連遺跡

が営まれた。多量の墨書土器、官人の装身具や祭祀の道具、大規模な倉庫等の建物跡は、この地の住人が公務に従事していたことをうかがわせる。

的場遺跡は越後国から都への貢納物であった「鮭」を獲り、加工する場であった。また、この遺跡から出土した「狄食」と書かれた木簡は、服属した蝦夷等の東北系の人々を食事でもてなし、交流したことを示すものと考えられる。



「狄食」の墨書がある木簡
的場遺跡出土（県指定文化財）

中世の舞台となった西区域

元暦元（1184）年の「後白河院庁下文写」（国上寺文書）に、赤塚は弥彦神社領の北限として登場する。高野山清浄院の「越後過去名簿」によれば、享祿2（1529）年には「カンハラ郡アカツカマチ」と記載され、町場となっていることをうかがわせる。

平島周辺は、西川と信濃川の合流地点に位置する交通の要衝であり、焼鮎やきふな（山田）など鎌倉時代前半の親鸞聖人來訪に関する伝説がある。永祿9（1566）年の魚沼市弘誓寺不動明王坐像墨書銘には「平嶋之郷新潟津」とあり、天正8（1580）年

には上杉景勝が「平嶋之関」を置いたことから、戦国時代の「新潟津」の位置はこの付近にあったと考えることができる。

さらに天正10年代の新発田重家の乱では、上杉景勝方は前線基地とした「木場城」を拠点として、新潟をめぐる攻防戦を展開した。



魚沼市弘誓寺不動明王坐像墨書銘
渡辺康文氏撮影 弘誓寺所蔵

内野新川の開削と水害克服の道

江戸時代になると、西川の自然堤防沿いと海岸砂丘のへりに新しい村が開発されていった。「○○小屋・○○郷屋・○○興野」や「○○新田」といった地名の新しい村は西川の周辺に

も広がったが、鎧潟・田潟・大潟（通称：三潟）周辺の低湿地では、農作物の浸水被害が絶えなかった。西区の村々では、水害等の損害や土地の収益を分かち合うために、定期的に耕地



新川底樋増設絵図 天保4（1833）年 個人蔵（市指定文化財）

交換して平等化する割地（軒前）^{わりち けんまえ}制度が行われた。さらに洪水から村を守る囲い土手も造られた。

江戸時代半ば以降、砂丘を堀割開削して川や潟を排水する工事計画が幾度となく請願されたが、いずれも新潟町の反対で実現しなかった。しかし、三瀧周辺地域の長岡・村上藩領の農民の熱意により、文化14（1817）年に堀割の許可が下り、難工事の末、文政3（1820）年に大潟から五十嵐浜までの内野新川（三瀧悪水抜堀割）^{しんかわ あくすいぬき}が通水した。

内野新川は内野金蔵坂を掘削し、幅約5.4m、長さ約76mの木製樋管^{ひかん}2門を西川の下に埋め込んで立体交差させた川であった。総工費は2万1,667両、人足は延べ165万2,700人、関係した村は52か村に及んだ。長岡藩領の負担した工費の9割近くは願人16人が調達したものであった。

明治時代を迎えても治水事業は最優先課題であった。明治15～19（1882～86）年に中ノ口川堤防改修工事が、さらに明治30年代末には山田島付近の信濃川河道変更工事が完成した。明治44（1911）年には、坂井郷普通水利組合によって、

坂井郷330余町歩の排水を目的として約1.7kmの関屋堀割が開削された。

一方、内野新川と樋管は、幕末以降3度の大改修を経て、大正2（1913）年には9連アーチ型の新川暗闇^{あんごう}が樋管に代わって設置された。昭和30（1955）年には西川水路橋が完成し、新川暗闇は撤去された。



大正2（1913）年に完成した新川暗闇
西蒲原土地改良区所蔵

内野と大野



戦前の大野町の風景

西区には北国街道が横断していた。宿場である赤塚は、往来する人々の荷物を運搬する馬や人足が輪番制で近隣から徴集された。内野は西川沿いで新潟町と赤塚の間に位置し、内野新川開削工事を契機として在郷町に発展した。信濃川と中ノ口川の合流部に位置する「大野」は、享保年間ころから大野町と呼ばれ、江戸時代中期には六斎市が開設されて集散地として賑わった。

明治7（1874）年に信濃川に川蒸汽船が就航すると大野は新潟～長岡間の着船場となった。そして大正9（1920）年には黒埼商會が新潟～大野間で、現市域における最初のバス事業を開始した。一方、大正元（1912）年には越後鉄道白山～西吉田間の開通と同時に内野駅が開業し、昭和8（1933）年には、新潟電鉄が黒埼地域を縦貫した。

砂丘地農業と市街化の進展

明治・大正期以来、西区の砂丘地帯では雑穀・ダイコン・カボチャ等が栽培されてきたが、昭和33（1958）年に内野地区でスプリンクラーが導入されて以降、タバコ・スイカ栽培が盛んになった。

西区の西川沿いの旧町村は、同29年の坂井輪村を皮切りに順次新潟市と合併した。坂井輪地区の小針・寺尾では、昭和30年代以降砂丘地から新興住宅地の開発が始まり、越後線や国道沿線・産業道路を軸に、ベッドタウンは内野・黒埼地区へと広がっていった。

昭和45（1970）年から新潟大学が五十嵐キャンパスへ移転を始めると、地域一帯は住宅地となった。同53年には北陸自動車道の新潟（西）～長岡間が県内で最初に開通し、同57年には物流拠点の流通センターが完成するなど、西区域は拡大

する新潟市域の象徴として、市街化推進の原動力的な役割を果たした。



昭和33年度完成の寺尾の公営住宅
（『昭和33年度 新潟市勢要覧』より転載）